

こんな本を読んできました

物語の舞台は、アルジェリアのオラン。突如として、この町を不幸が襲います。よるめく鼠の大量死と、さらには人間の奇妙な死。この不気味な兆候こそ、ペストとの果てしなき闘いの始まりでした。

災禍の悲劇は、まさに恐怖と連帯を伴って、物語のあちこちで強烈な印象を放ちます。終わりなき闘いと、敗北が導く疲弊と困難。そして、絶望に慣れてしまうほど、人間の心を支配するペストの深い闇。今の私たちを取り巻くコロナ禍の状況に、思わず共感を抱かずにはいられませんでした。

しかし、「ペストと闘う唯一の方法、それは誠実さなんだ」という医師リユーの言葉が、胸を震わせます。コロナに翻弄されるこの世界で迷わぬように、一筋の光が、道を照らしてくれたような気がしました。



タイトル	ペスト
著者	カミュ／作, 三野 博司／訳
出版	岩波書店

呉市の歴史と関わりの深い「海」に関する所蔵資料を紹介します。



海の文庫

タイトル	海獣学者、クジラを解剖する 海の哺乳類の死体が教えてくれること
著者	田島 木綿子／著
出版	山と溪谷社

著者の田島さんはクジラやイルカを研究するため日本中を飛び回っています。浜辺にクジラやオットセイが打ち上がったと聞けば駆けつけ、亡くなったクジラたちを脂まみれになりながら解剖。どうして死んでしまったのか調査し、これからのために標本やはく製にしています。クジラたちに全力を尽くして向き合う姿が軽快な文章で書かれていて、ぐいぐい引き込まれます。

ラッコが陸上で動くのが苦手なことやジュゴンが肺から空気を抜いて潜水することなどをこの本で初めて知り驚きました。今度水族館に出かけた時にはじっくり観察してみたいと思っています。

あなたもぜひ、この本を読んで圧倒的な大きさと脂に包まれたクジラたちの謎にロマンを感じてみませんか？